

特選 名著複刻全集 近代文学館

昭和46年5月1日 印刷

昭和46年5月10日 発行

堀 辰雄著

聖 家 族

江川書店版

刊 行 財団法人 日 本 近 代 文 学 館

東京都目黒区駒場4-3-55

代表者 塩 田 良 平

編 集 特選名著複刻全集近代文学館・編集委員会

代表者 稲 垣 達 郎

総発売元 株式会社 図 書 月 販

東京都新宿区市ヶ谷本村町35 千代田ビル

代表者 中 森 蒔 人

製 作 株式会社 ほ る ぶ 出 版

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 荒 井 正 大

東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麹町3-2 相互第1ビル

代表者 長 尾 義 輝

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

聖家族

聖家族

堀
辰
雄
著

江川書房版

序

聖家族は内部が外部と同様に恰も肉眼で見得られる對象であるかの如く明瞭にわたくし達に現實の内部を示してくれた最初の新しい作品の一つである。それは譬へば海底が典雅な未知の世界に溢れてゐるのと等しく聖家族の構造も端整妍美馨香時に溢るともいふべき雍

容をもつて姿勢の妙を盡してゐる。確にこれは堀氏の
一時代の頂點を示す作品であつて、緊密非常、暗移漸
轉、綿密廻環、まことに得難い逸品である。

横光利一

聖家族

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだつた。

死人の家への道には、自動車の混雑が次第に増加して行つた。そしてそれは、その道幅が狭いために、各々の車は動いてゐる間よりも、停止してゐる間の方が長いくらゐにまでなつてゐた。

それは三月だつた。空氣はまだ冷たかつたが、もうそんなに呼吸しにくくはなかつた。いつのまにか、もの好きな群集がそれらの自

動車を取り圍んで、そのなかの人達をよく見ようとしながら、硝子窓に鼻をくつつけた。それが硝子窓を白く曇らせた。そしてそのなかでは、その持主等が不安さうな、しかし舞踏會にでも行くときのやうな微笑を浮べて、彼等を見かへしてゐた。

さういふ硝子窓の一つのなかに、一人の貴婦人らしいのが、目を閉ぢたきり、頭を重たさうにクッションに凭せながら、死人のやうになつてゐるのを見ると、

「あれは誰だらう？」

さう人々は囁き合つた。

それは細木さいぎと云ふ未亡人だつた。——それまでのどれより長いやうに思はれた自動車の停止が、その夫人をさういふ假死から蘇らせ

たやうに見えた。するとその夫人は自分の運轉手に何か言ひながら、ひとりでドアを開けて、車から降りてしまつた。丁度そのとき前方の車が動き出したため、彼女の車はそこに自分の持主を置いたまま、再び動き出して行つた。

それと殆ど同時に人々は見たのだつた。帽子もかぶらずに毛髪をくしやくしやにさせた一人の青年が、群集を押し分けるやうにして、そこに漂流物のやうに浮いたり沈んだりして見えるその夫人に近づいて行きながら、そしていかにも親しげに笑ひかけながら、彼女の腕をつかまへたのを――

その二人がやつとのことで群集の外に出たとき、細木夫人は自分が一人の見知らない青年の腕にほとんど靠れかかつてゐるのに、は

じめて氣づいたやうだつた。彼女はその青年から腕を離すと、何か問ひたげな眼ざしを彼の上に投げながら、

「ありがたうございました」

と言つた。青年は、相手が自分を覺えてゐないらしいことに氣がつくと、すこし顔を赤らめながら答へた。

「僕、河野です」

その名前を訊いても夫人にはどうしても思ひ出されないらしいその青年の顔は、しかしその上品な顔立によつていくらか夫人を安心させたらしかつた。

「九鬼さんのお宅はもう近くでございますか」と夫人がきいた。

「ええ、すぐそこです」

さう答へながら青年は驚いたやうに相手をふりむいた。突然、彼女がそこに立ち止まつてしまつたのだ。

「あの、どこかこのへんに休むところはございませんかしら。なんだかすこし氣分が悪いものですから……」

青年はすぐその近くに一つの小さなカッフェを見つけた。――そのなかに彼等がはひつて見ると、しかしテエブルは埃のにはひがし、植木鉢は木の葉がすつかり灰色になつてゐた。それをいまさらのやうに青年は夫人のために氣にするやうに見えたけれど、夫人の方ではそれをそれほど氣にはしてゐないらしかった。鉢植の木の葉の灰色なのは自分のかなしみのためのやうに思つて居るのかも知れぬと青年は考へた。

青年は夫人の顔色がいくらかよくなつたのを見ると、すこし吃りながら言つた。

「僕、ちよつとまだ用事がありますので……すぐまた参りますから……」

さうして彼は立ち上つた。

そこに一人ぎりになると、細木夫人はまた目をとちて死人の眞似をした。

——まるで舞踏會かなんぞのやうなあの騒ぎは何といふことだらう。私にはとてもあの人達の中へはひつて行けさうもない。私はこのまま歸つてしまつた方がいい……

それにしても夫人はいまの青年の歸つてくるまで待つてゐようと思つた。何だかその青年に一度どこかで會つたこともあるやうな氣がし出したから。さう言へば何處かしら死んだ九鬼に似てゐるところがあると彼女は思つた。そしてその類似が彼女に一つの記憶を喚び起した。

數年前のことだつた。輕井澤のマンペイ・ホテルで偶然、彼女は九鬼に出會つたことがあつた。その時九鬼はひとりの十五ぐらゐの少年を連れてゐたが、彼はその少年にちがひないと思ひ出した。――その快活さうな少年を見ながら、彼女がすこし意地わるさうに、「あなたによく似てゐますわ。あなたのお子さんちやありませんの？」さう言ふと、九鬼は何か反撥するやうな微笑をしたきり黙りこ